

大阪女学院中学校・高等学校

2008年度 学校評価(自己評価) 及び

2009年度 学校関係者評価

大阪女学院中学校・高等学校 学校評価委員会

大阪女学院中学校・高等学校 学校関係者評価委員会

I. はじめに

【学校評価(自己評価)について】

(大阪女学院中学校・高等学校 学校評価委員会)

本校は2009年に創立125周年を迎えたが、それはキリスト教主義に基づき社会に貢献する人間を育成することをめざしての125年間であった。

その伝統を受け、現在の大阪女学院中学校・高等学校は以下の「建学の目的(大阪女学院ミッションステートメント)」の下、6つの具体的「教育目標」を掲げて、日常の教育活動を行っている。

[建学の目的(大阪女学院ミッションステートメント)]

大阪女学院は 創造主を畏れ キリストの教えに従って 一人ひとりを愛し

何が重要であるかを見抜く力を養い 喜びをもって 進んで社会に仕える人を育む

[教育目標]

- ①すべての人間は、神によって創られたかけがえのない存在であると認識して、人権尊重の精神をもつ人間を育成する。
- ②自由で、伸び伸びした校風の中で、自立した人間を育成する。
- ③価値観が変化し、激しく動揺する現代社会の中で、国際的視野で物事を見る力を持ち、どのような困難にも打ち克って、明るく、主体的に生きる人間を育成する。
- ④正しい知識を身につけさせ、日常生活の雑事をこえて、物事の本質を見極める力をつける。
- ⑤確かな学力を身につけさせ、生涯にわたって学習を続けていく基礎を確立させる。
- ⑥豊かな情操、高い知性、思いやりの心をもって、自分を生かし、他の人を生かす人を育成する。

これらの教育目標の一部に対しての評価は、毎年発行されているキリスト教教育感想文集「えのき」や解放(人権)教育の通信等のかたちで、生徒の感想、意見として明らかにしてきた。学校評価を実施するにあたり、教育目標について、何がどの程度到達しているか、何が達していないのかを生徒、及び教職員のアンケートの結果をもとに数量化し、分析し、改革につなぐ。

そこで、上記の教育目標について具体的に評価するために、それらを以下の4つの大項目の柱にまとめ、本校教員11名による学校評価(自己評価)委員会を組織し、点検評価を行った。

(A)キリスト教教育、解放(人権)教育*による人間教育(①③)

・宗教教育・解放(人権)教育

(B)様々の行事、生活指導等を通じてのよりよい人間関係の構築(②④⑥)

・生徒会活動・生活指導・クラブ活動

(C)教科学習、国際理解教育、図書教育による豊かな学力と進路の保障(③④⑤)

・教育課程・学習指導・進路指導・姉妹校YFU留学生・国際交流・図書館

(D)学校管理、安全管理、保護者地域との連携

・保健管理・組織運営・情報提供・へール会・入試対策

*①～⑥は上記「教育目標」の番号を指す

*解放(人権)教育の「解放」という言葉は、自分も含め、人間の心が真に自由で、解放されたものになるようにとの願いを込めて使用している。

【学校関係者評価について】（大阪女学院中学校・高等学校 学校関係者評価委員会）

2008年度に実施された学校評価(自己評価)を受け、以下のような手順で学校関係者評価委員会を組織し、上記各項目に沿って学校関係者評価を行った。

(1) 学校関係者評価委員会の発足

以下の6名により学校評価委員会を発足させた。

学識経験者 1名 (委員長)

本校保護者代表 3名

本校同窓会代表 2名

陪席 中学校校長、高等学校校長、中学校教頭、高等学校教頭、

(2) 学校関係者評価委員会 委員長の選任

学識経験者 有澤慎一氏(日本キリスト教団八尾東教会牧師)を委員長に選任した。

(3) 学校関係者評価委員会の開催

①学校視察 始業から終業までの学校生活について視察を行った。

2009年11月20日

②学校関係者評価委員会 第1回 2009年10月22日

第2回 2009年11月20日

第3回 2010年1月22日

2008年度「自己評価」を受けて協議を行い、以下の学校関係者評価を作成した。

Ⅱ. 学校評価(自己評価)と学校関係者評価

(A)キリスト教教育、解放(人権)教育による人間教育

自己評価

本校は建学の目的に基づき、毎朝の礼拝、修養会、伝道週間、宗教行事を通して、自己の生き方を見つめ、自己と他者との関わりを学ぶことを大切にしてきたが、『本校はキリスト教主義の学校として、礼拝や宗教行事等の様々な機会を通して、「すべてのものは、それ自身で存在しているのではなく、神様によって創造されて存在していること」「あなたを含め、人間一人ひとりが、神様にとって大切な存在として愛されていること」を皆さんに伝えようとしています。そのような学校の方針を理解していますか』との質問に対して中学で70%、高校で84%がその学校の方針を理解していると回答し、「朝の礼拝(チャペル・クラス)によって、自分の生き方や他者との関わりかたについての考えが深められていると思いますか。」との質問には中学で46%、高校で73%が肯定的回答をした。この質問で肯定的回答が高校に対して中学が低かったのは、ほとんどの中学入学生にとってキリスト教は初めての出会いであり、礼拝から深く学ぶことができるようになるためには時間が必要であるということを物語っている。また、生徒達の発達段階にしたがって礼拝内容の理解は変わっていくことを表しているともいえる。

「宗教行事(修養会・伝道週間・訪問行事等)によって、自分の生き方や他者との関わりかたについての考えが深められていると思いますか。」との質問には中学で62%、高校で79%が肯定的回答をしており、キリスト教教育によって自己と他者の関係に、生徒の心が一定向けられていると考えてよいのではないか。何れも先に述べたように中学より高校の方が高い回答率になっており、中高の6年間一貫教育を通して学校の方針が理解され、培われていっているといえる。また教職員への同内容の質問も高校回答と比較的近い割合の回答になっており、教師の指導の手応えは生徒達の意識と符合しているといえる。

本校の解放(人権)教育について『**本校の解放(人権)教育は「人権を尊重(自分を生かし、他の人を生かすこと)できる人間の育成」を目的として行われています。本校の解放(人権)教育についてどの程度理解していますか。**』との質問に中学で70%、高校で81%が理解をしているとの肯定的回答をし、「**学年の解放HRを中心に行われた解放(人権)教育のテーマを通して、確かな知識と人権感覚が身についたと思いますか。**」との質問に中学で63%、高校で78%が肯定的回答をした。本校の教育目標である「人権尊重の精神をもつ人間の育成」はかなり達成されていると考えられる。

解放(人権)教育により「**あなたは、お互いの個性を尊重し、違いを認め合うことができるようになったと思いますか。**」との質問には中学73%、高校86%が肯定的回答をしており、教職員への同様の質問の回答率72%よりも高くなっており、今後の教育を進める教師の励みになるであろう。

学校関係者評価

- 朝の礼拝が静粛に、また積極的に参加しようとする生徒達の雰囲気を感じられ、アンケート結果が妥当なものであることがよく理解できた。
- キリスト教の知識がヨーロッパの歴史の学習や美術や音楽を理解する上でも、大いに役立ったと多くの卒業生達が述べており、卒業後に大きな意味を持つことになる。キリスト教教育が大阪女学院教育の土台になっていると思われる。
- 解放(人権)教育について、知識を得て頭で理解できても、生徒達の生活の中で生かされているかが最も大切なことなので、学校として注意深く見守ってほしい。
- 一人一人の付き合いでは良い人間関係が作られていても、集団になったときに勇気ある良い行動ができるかが大切な問題であるので、更に人権教育を充実してほしい。
- 中学・高校で人権について学習したことが、卒業後10年以上も経過した後、自分の生き方に影響を及ぼしているとの話しをよく聞くので、継続して教育を進めてほしい。
- 大阪女学院の良さは、自分らしさを出せて、それぞれの居場所があることであるので、その校風を大切にしてほしい。
- 解放(人権)教育の授業参観で、高校2年生のリポーター達が「コリアタウン」を訪れ、取材した映像を見たが、真剣で明るいドキュメンタリーに感銘を受けた。

(B)様々の行事、生活指導等を通じてよりよい人間関係を構築する

自己評価

本校の人間教育はキリスト教教育をベースにしなが、生徒会や学校主催の多くの行事を通して、互いの人間関係を深めるプロセスを体得していくことを目指しているが、「**生徒会主催の体育大会・文化祭が活発に行われていますが、生徒同士の関わりを深めることに有意義であると思いますか。**」との質問に中学で87%、高校で88%が肯定的返答をし、「**学年が実施主体となって行われる修学旅行、スキー学習(中1)、合唱祭、水泳大会等の学校行事は、友達との関わりを深め、クラスの一体感を強めることに有意義であると思いますか。**」でもほぼ同様の回答があった。

体育大会、文化祭、合唱祭などで生徒達が生き活きと活動していることは、既知のことであったが、それがデータとして明らかになったといえるであろう。ただ教員の体育祭文化祭についての同様のアンケート結果は生徒の肯定回答以上の93%にのぼっており、生徒の中には意義を発見できない生徒が若干でもいると思われるので、その生徒達への注意深い関わりが必要であると思われる。

次に本校のクラブ活動についても聞いたが「**本校のクラブ活動は、活発な方だと思いますか。**」について中学で82%、高校で80%が肯定的に答えており、教職員の58%よりもかなり高い回答率になっている。それは、生徒達のクラブに対しての意識と期待感の大きさを示しているといえる。2009年度から実施する週6日制によって、特に中学では更にクラブ活動が行いやすくなり、クラブ活

動がより活発になることを望むものである。

本校では生徒の個性と自主性を尊重することで、自立した人間の育成を図ってきているが、校則をはじめ約束を守ることも大切に指導したいと考えている。そのために生活指導についてもアンケートを実施したが、「**本校の生活指導については、十分に理解していますか。**」の質問に中学で70%、高校で78%が本校の指導に理解を示し、これは教師の回答率67%より高い数字を示しており、生徒の理解が教師の意識よりかなり進んでいることが明らかになった。

また、「**本校の生活指導についてどう思いますか。**」の質問に中学で53%、高校で47%が指導は適切であると考えているが、中学で33%、高校で38%が指導が厳しいと考えていた。逆に、本校の生活指導がゆるいと感じている生徒は中学で13%、高校で12%であるのに対して、教員では27%にのぼり、かなりの意識のズレが生じていることが分かった。

さらに「**本校の生活指導では、基本的な生活習慣や社会のルール、公共のマナーを身につけることを重視していますが、教師による指導は充分に行われていると思いますか。**」との質問には中学で60%、高校で56%が肯定的回答をしたが、中学の39%、高校の42%が否定的回答をしており、「**本校の生活指導についてどう思いますか。**」の質問に「ゆるい」と答えた生徒との関連について、更なる検証が必要であろう。生活指導についての中学生と高校生との意識の差異の解消と、生徒達が厳しいと感じなくても、校則が守られる取り組みが検討されなければならないであろう。

「**本校の先生は、生徒の悩みの相談によくのっけてくれていると思いますか。**」との質問には中学では52%、高校で55%が肯定的回答であるが、否定的回答もそれに近かった。中学入学後、中学卒業までの3年間の心の成長は本当に著しいものがあるし、高校においても1年から3年への成長は大人に近づく大きなステップといえる。その学年進行に伴う悩み相談についての回答率の推移を今後見ていく必要がある。

一方、教職員への「**本校は、生徒の悩みの相談によくのる体制がとれていると思いますか。**」との質問にたいして肯定的回答は70%にたいして31%が否定的回答であった。「悩みの相談にのれる体制が十分でない」と教職員が考えている理由が何かについて学校として明らかにしていく必要がある。

また「**本校の先生は、生徒が充実した学校生活を送れるよう心がけて指導していると思いますか。**」との質問の肯定的回答は中学61%、高校61%であるが、これも上記の生徒の悩み相談と同様のことがいえる。

「**あなたにとっての学校生活は、楽しく充実していると思いますか。**」との質問に中学、高校とも85%が肯定的回答をした。「青春時代に友人達と楽しいと思える経験をした人は、人生の苦難に出会った時、その経験を通して苦難に耐えていける。」との言葉があるが、多くの生徒達が学校生活が楽しく充実していると思えることは、本校の誇りである。しかし楽しく充実しているとは思えない15%の生徒について、注意深く心にかけて導いていく必要がある。

学校関係者評価

- 中学校での生活指導がゆるやかで、高校の方がきびしいとの意見を聞くことがある。中学でしっかりと生活習慣を身につけて、高校に成長するにつけて、ゆるやかな指導になる方がよいのではないか。
- 今の高校の生活指導がきびしいとは思わない保護者もいるが、卒業生には女学院の自由を考えさせる指導がよかったと思っている人も多い。
- 自由であっても公共のマナーはきっちり身につける必要があるし、家庭の問題も大きい。

○過去に来校者に挨拶が出来ていた時代があるが、現在は十分とは言えない。そのような教育も必要ではないか。また、生徒の先生や年長者への言葉使いも、時代の変化か、昔と比べてよいとはいえない。

○集合の際、最終的には静粛になるが、早く静粛になるよう日頃の習慣とする必要がある。

(C)教科学習(授業評価を含む)、国際理解教育、図書教育による豊かな学力と進路

自己評価

「本校のカリキュラムは充実していると思いますか。」との質問に中学では79%が充実していると答え、高校では63%が肯定的回答をした。高校での肯定的回答が中学より低い原因が何かは今後分析していく必要がある。

また、「あなたは、集中して授業を受けている方だと思いますか。」との質問に肯定的に答えた者が中学で53%、高校で62%で、決して高い回答率とは言えない。生徒が集中して授業を受けることができるように指導を強めると共に、授業の内容など学校側の分析も進める必要がある。

補習学習については中学では日常的に学力補充としての補習、高校では1、2年に実力錬成のための土曜講座、高校2年、高校3年には夏期休みなどに学力錬成講座を実施してきたが、「**学校で実施されている様々な補習(土曜講座も含む)は、理解を深め、学力を伸ばす上で役立っていると思いますか。**」

との質問に中学では65%が肯定的回答をしているが、高校での肯定的回答は47%に留まった。その1つの理由は、土曜講座は希望者対象に行っており、回答者に補習受講経験がないものもかなりの数含まれることが考えられる。補習希望者に継続してモチベーションを維持させる補習の内容を含め、方策の検討が必要であると思われる。

本校では学力の推移を検証するために中学では「学力推移調査」(ベネッセ)、高校ではスタディーサポート(ベネッセ)を実施し、その結果を受けて年2回の面談を行っているが、「**学力推移調査や模擬テスト・スタディサポートや面談によって、あなたの学習意欲が向上したと思いますか。**」との質問に中学では肯定的回答が40%に対して、否定的回答が56%、高校では肯定的回答が52%に対して、否定的回答が46%であった。自己学力診断の分析と指導の結果が、次のテストの上昇への意識付けにまで至っていないことが、この結果の大きな原因であろう。同様の質問に対しての高校教員の回答者の59%が肯定的回答に対して、中学教員では35%に留まっているが、全校での特設面談時間を開始して未だ2年であり、一定期間の継続の後の結果を見て、再検証する必要があると思われる。

国際理解教育の一つとして、本校では毎年、オーストラリア姉妹校から4ヶ月間の留学生を3人、YFUを通じて年間留学生1名を2学年で受け入れ、チャペルでの全高校生へのスピーチ、希望者が出席する年4回の「留学生を囲む会」等、全高校生との交流の機会を大切にしてきた。全高校生で73%の生徒が「**留学生が本校で生活することにより、国際理解が深められていると思う**」と答えている。しかし学級によっては交換留学生のいないところもあり、もう少し多くの交換留学生を迎えることができれば、生徒達の国際理解も更に深まるであろう。

また高校1年では夏期海外研修としてボストン(08年度35名)、サンフランシスコ・モントレイ(08年度30名)、ニュージーランド(08年度39名)を訪問し、1学年生徒の38%が研修に参加しているが「**現在、高校1年生を対象に海外研修を実施しています。そのことにより、国際理解が深められていると思いますか。**」との質問に、教員では70%、高校で83%の生徒が肯定的回答をしており、参加していない生徒も含め、海外研修への期待感は大変高いという結果になった。

図書教育の評価については、毎年図書館独自にアンケート調査を続け、「図書館報告」として分析を行い、運営が行われている。

●全生徒による全教科についての授業評価結果について

全授業についての5項目のアンケートを全生徒対象に実施したが「**先生は、年間の授業計画を説明し、計画通り行っていると思いますか。**」との質問に中学全体回答者で74%が肯定的回答をし、高校全体回答者で77%が肯定的回答をした。年間の授業計画を生徒に伝えることは授業の第一歩として当然行うことであり、全教員が伝えていく必要がある。

また「**先生の説明は、はっきりして分かりやすく、テンポよい授業だと思いますか。**」との質問には中学全体回答者で66%が肯定的回答をし、高校全体回答者で70%が肯定的回答であった。授業は分かりやすくあるべきであり、教科、学年、個々の教員がそれぞれの立場で分かりやすく、テンポのよい授業を更に進める努力が必要である。

「**先生は、私語に適切(てきせつ)に対処し、クラス全体(分割クラス)の一体感を持たせていると思いますか。**」との質問には中学全体回答者で61%が肯定的回答をし、高校全体回答者で68%が肯定的回答であった。授業には講義調の授業から生徒の討論中心の授業、実技授業と多様であるが、クラス全体が一体感を持つ授業ができることで、生徒個人の理解と成果も高まってくるものであり、一層の向上を目指さなければならない。

「**先生の授業を受けて、教科(科目)内容に、より興味を持てるようになったと思いますか。**」との質問には中学全体回答者で54%が肯定的回答をし、高校全体回答者で60%が肯定的回答であった。生徒が中学、高校を経て更にやりたい学問を決めたり、どのような分野で仕事をしたいかというモチベーションの源が興味ある授業と言ってもよいであろう。よく分かる授業とともに、その分野の興味、関心が引き出されるような授業が実現すれば、その他の様々の学力問題は自ずから解決するといってもよい。

「**先生は、生徒自ら考えさせるための問いかけをよくしていると思いますか。**」との質問に中学全体回答者で56%が肯定的回答をし、高校全体回答者で61%が肯定的回答であった。講義調の授業であっても、生徒自ら考えさせる授業は可能であろうし、生徒が本当に考える授業こそが、いつまでも頭に残る授業になる。

学校関係者評価

- 授業を参観した印象は静かによく勉強していて、学習に身を入れていると感じた。しかしさらに分かりやすい、充実した授業が行えるように努力をしてもらいたい。
- 国際理解が深められているとの生徒の回答率の高さを、すこし意外に感じた。海外研修については海外観光的な部分もあり、さらに国際理解が深まるプログラムになるよう検討を進めてほしい。
- 英語教育について多くの評価を得ているが、施設面でもカリキュラム面でも、大阪女学院が理系にも力を入れていることはもっとアピールをした方がよいのではないか。
- 土曜講座等の実力錬成の補習については、学習項目別の補習や、英語検定取得のための補習など目的を明確にする方法もあるのではないか。また、現在は希望者対象であるが、義務化することも検討してよいのではないか。
- 女学院中学で高校分野まで学習したことについては、高校入学生に対して補習を行っているが、女学院中学出身者から自分たちも受講させてほしいとの希望がある。
- 進路指導について職業体験などを考えてもよいのではないか。

(D) 学校管理、安全管理、保護者地域との連携

自己評価

本校は戦後復興以来、校地緑化に取り組み、1992年の大阪施設緑化賞最優秀賞や2007年の都市景観建築特別賞などを得ており、生徒の緑化環境への満足度は高いと思われるが、今回の調査でそれがデータとして明らかになった。「**緑の多い大阪女学院のキャンパスは、あなたに安らぎを与えていると思いますか。**」との質問には中学で77%、高校で86%の生徒が肯定的回答をした。また「**大阪女学院の教育設備は充実していると思いますか。**」に対しては中学で79%、高校で80%の生徒が肯定的回答をし、「**大阪女学院の施設・設備は、安全な学校生活を送る上で整備されていると思いますか。**」については中学で82%、高校で87%の生徒が肯定的回答をした。

生徒の健康管理に関わる保健室についての問い「**本校の保健室は、生徒の健康管理に積極的に取り組んでいると思いますか。**」に対して中学で61%、高校で68%の肯定的回答であった。しかし教員では95%が肯定的回答であり、健康管理についての保健室の取り組みを生徒自身がどれだけ理解しているか疑問であると思われる。

また「**本校の保健室は、心身の悩みを相談するのに利用しやすい雰囲気があると思いますか。**」との質問には肯定的回答は中学で33%、高校で46%に留まった。保健室利用者は体調不良や外傷の治療がほとんどで、心身の悩みの相談をしている生徒はいわゆるリピーターが多く、一般の生徒達にとっては、悩みを相談できる場所としての意識はあまりないと考えられる。また、悩みの相談については週3日間の相談室カウンセラーがその役割を果たしていることも、この結果に結びついていると思われる。しかし、保健室が心身の悩み相談を受け入れようとしているとのサインは、何らかの方法で伝えていく必要はあると思われる。

「**本校の保健室は、利用しやすい場所にあると思いますか。**」との質問には中学で60%、高校で43%の生徒が否定的回答をした。中学、高校の各校舎内に保健室があることが生徒達には望ましいことであろうが、現実的には困難であると言わざるをえない。「**本校の保健室は、室内・器具などが清潔に保たれていると思いますか。**」との質問には中学で78%、高校で87%が肯定的回答を行った。

学校関係者評価

- 緑化環境は生徒達にも大変よい影響を与えているといえる。
- 中学、高校教室棟の校舎が大地震に備えて耐震補強工事が完了していることは安心である。体育館、図書館などの耐震補強工事も早めてほしい。
- 発達障がいを持つ生徒や、不登校、保健室登校の生徒達への対応を組織的に進めるシステムを検討していることは心強く思う。
- 保健室が運動場に面していることは利点であるが、教室棟から若干距離があることと、中高が使用するにはやや手狭ではないか。
- 入学生の安定的確保と、大阪女学院教育の理解者を増やすためにも、卒業生の子女の募集について力を入れた方がよいのではないか。

3. 学校評価委員会、学校関係者評価委員会からの重点課題

以上(A)～(D)の具体的柱について、アンケート結果をもとに評価を行ってきたが、各校務分掌、各教科、各教職員がこれらの評価をもとに、よりよい教育が行われるために、さらに研鑽を重ねていく必要がある。そして、以上の評価を通して明らかになった課題の中で、まず取り組むべき具体的課題として以下の3点をあげたい。

- 教科授業の更なる充実を意欲的に進めること。
- 高校、中学の補習など学力を充実させる取り組みを改善し、更によりものにする。
- 教室棟、チャペルの耐震工事が終了し、また工事が行われていない体育館、図書館棟の耐震工事を行うこと。

以上